



〈研究〉清教倫理的經濟思想：リチャード・バツクス ターの研究(2)

福田，敬太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 32(4):639-665

(Issue Date)

1922-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053425>



清教倫理的經濟思想（其二）

——リチャード・バックスターの研究——

神戸高等商業學校講師

商學士 福田敬太郎

勞働及び職業なる概念を經濟學的に規定する爲めには其等の言葉が歷史上如何に發展し來つたか如何なるものを捕捉する爲めに用ひられ來つたかを温古する必要がある。然るに經濟學上の諸文獻に於て此等の概念が現代的意義を以て現はれたのは第十七世紀以後のこと、ペテイに由つて勞働が生産要素の一として土地と並べらるゝに至るまでは、斯くの如き明確性を以て取扱はれたことはなかつた⁽¹⁾。其れ以前に於ては此等の概念は主として道德哲學的、道德神學的著作の中に現はれてゐる。従つて古き時代に於ける勞働概念及び職業概念は自ら倫理學的・神學的に規定せられる。茲に於て勞働及び職業に就て特別の經濟倫理的考察が必要と成る。今我々はリチャード・バックスターを中心として考へて見たい。

チャールス一世の治世の下に於て最も重大なる問題の一は産業組織の改善之れであつた⁽²⁾。教會も國家も力を協せて産業的諸團體、新企業を規矩統制することに努めたけれども、總て官僚的な方針は成功しなかつた。獨占事業、特許事業、保護政策は時代の潮流に抗するものであつた。一般

的傾向は産業的自由を指してゐたのである。個人は國家の干渉を排して自己の活動を自由ならしめんと企てた。政治上に於ける專政君主制と宗教上に於ける監督僧職制とに對抗して、下院と非國教徒、特に清教徒は政治上、宗教上、遂に經濟上の個人の自由を確立することに努めた。茲に於て個人の私的活動は神の榮を現はすべき「召命」(calling)であると考へられ、正しき利益は神の嘉し給ふところを示すものであり、又其れを獲んとする勤勉は缺くべからざる道德的且つ宗教的義務であると感ぜられた。斯くして世俗的職業は聖化せらるゝに至つたのである(3)。我々は今此の代辯者の一人をバックスターに發見する。

固より勞働は古くから性的禁欲生活の一手段として尊重せられて來た。此れは初期並に中期カンリシズムの實踐的倫理の結果であるが、宗教改革を経たる後、第十七世紀の清教主義に於ても同様のことが全く無くはない。バックスターの主要なる著書の中にも此の種の禁欲的手段としての勞働と云ふことが屢々繰返されてゐる。即ち勞働は清教主義の所謂「汚れたる生活」を潔め、總ての誘惑を斥け、肉慾の耽溺を避けるものであると考へられた。然し乍ら性的禁欲は清教主義に於ては修道院主義に於けると異なり原理上絶對的のものではなく、結婚生活も神と人とに奉仕する途としては許される。バックスターに従へば性的交通は夫婦の義務であつて、「産出を目的とする節度ある結合」(四・一九)である。唯々總ての宗教的疑惑に對すると同じ程度に於て、性的誘惑に對しても、小食・菜食・冷水浴等と共に、勤勉なる勞働が勧められたのである。「怠惰に暮すこと勿れ。汝の職業の仕事に時を盡すべし。怠れる心は慾情の蛇の爬ふところ。數多き諸罪を巢ふところなり。」(四・二五)

茲に於て勞働は單に誘惑を避け慾情を制する如き消極的手段たるに止まらず、其れ以上のものであらねばならぬこととなる。そこでバックスターは善行の倫理的意義を説き、信仰生活に於て基督の僕として如何に處すべきかを教へつゝ、職業勞働の神學的解明を行つた。信者の生活は神に對する奉仕であり、謹慎・信義・勤勉・熱心及び喜悅を以て敬虔・正義及び慈善を行ふことに由つて出來得る限りの善行をなすことは信者に課せられたる任務である。此の爲に神は信者に各々適當の才能を與へ給ふた。其れを改善利用することは神の僕としての信者の義務である。而して善行をなすに當つては常に多數者の福利を念頭に置くべきであつて、殊に教會と國家とのことを深く考へねばならぬ。斯くして人々は各自の有する地位と職業とに忠實であるべきであり、決して召命なくして他人の仕事に手を出してはならぬ。故に、職業を選擇場合には熟慮して神と人にと最も奉仕的なものを選択せねばならぬ。決して一時の慾に驅られて富貴に走ることなく、善を積み罪を避くることの出来るものを採るべきである。(二・三二八―三三二)

何故に勞働は絶對的に必要であるか。言ふまでもなく其れは聖書に啓示されたる神の命令であるからである。テサロニケ後書三章一〇―一二、同前書四章一一。エペソ書四章二八。創世紀三章一九。箴言三十一章三一・三三。信者に取つては此等の聖句だけで勞働の必要なる理由は充分であるパウロの「人若し働くことを欲せずば食すべからず」との言葉は無條件に通用する。勞働を忌避することは恩寵の衰退する前兆である。凡そ活動は總ての力の目的であり、活動なければ力は空しきものである。理解し、讀書し、歩行する力があつても其れを働かせて用ひなければ無智・文盲・跛者

に等しく無價值である。勞働は實に自己の有する天賦の力を用ふることである。神が人を生かし、且つ彼に能力を授くるのは活動する爲めに外ならぬ。勞働は力の自然的にして又道德的なる目的である。勞働に由つて人は最も良、神に奉仕し得、且つ神の旨に適ふことが出来る。加之、人は自己のことを慮るよりも多數の他人のことを考へねばならぬ。多數者は個人よりも高く評價せらるべきものである。其れ故に各人は多數の他人の爲めに、殊に教會と國家との爲めに、あらゆる善を爲すべき義務がある。而して此のことは怠惰に由つてなされず、勞働に由つてのみなされる。蜜蜂が巢に蜜を貯へる爲め勞する如く、社會的動物たる人間も彼の屬する社會の爲めに勞働しなければならぬ。更に勞働に由つて人は自己の體力並に心力を維持し得る。勞働せざる者は與へられたる能力を失ひ、健康を損ひ、生命をも亡ぼすに至る。勞働する者は體力を増進し、心力を練磨し、與へられたる才能は益々成長する。最後に、而して結局は根本の理由に立ち返ることになるのであるが、勞働は我々の日用の糧を獲べき神の命じ給へる手段なり、とバックスターは言ふ。(三・五〇八一五八二)

バックスターの勞働觀には宗教的社會連帶の思想が其の根底に横はつてゐる。多數者の尊重は既に功利主義倫理思想に宗教的背景を與へてゐるものであると云へる。勞働に由る熟練の進歩を考へたことは彼の生理學的・心理學的考察の注意深いことを語つてゐる。斯くの如くに勞働の絶對的必要を説くところに明かに中世的教義からの一進歩を見出せる。成程、トマス・ダキノも亦パウロの言葉を解釋した。然し彼に従へば勞働は唯々個人及び團體の生命維持に必要な自然的命令である故に生命維持の目的を棄てた場合には此の命令の適用も止まる。従つて此の命令は民族的には通用

するけれども、個人的には通用しない。殊に勞働に依らずして、所有に依つて生活する者には此の命令は無關係であり、同様に冥想を行ひ精神的活動のみに従ふ者は此の命令の外に立つてゐる。修道院的に言へば、「教會の寶」(thesaurus ecclesiae)の増加を來すべき生産力は勞働ではなく、祈禱と禮拜とである。然るに斯くの如き意味の勞働義務はバックスターに由つて全然破砕せられた。彼は勞働義務が總ての能力者に課せられて居り、富も宗教も其れを免ずる理由とならぬことを力説した。即ち宗教は人々をして祈禱と冥想以外の總ての他の勞働を免れしめるか、との問に對するバックスターの答は斯うである。

「或る人々は能力と機會と召命とを有し牧師と成り、宗教に由つて世俗的勞働を免除せらるゝと雖も彼等の行ひ得る他人の爲にする精神的勞働を免除せらるることなし。宗教の假面を冠りて應接を避け、他人の爲に善を行はず、自己の爲めにのみ生くる者は、宗教を用ひて其の實宗教の要旨たる愛の行を排斥するなり。」(三・五七八―五七九)

又富者は勞働を免ぜられてゐるか、との問に對しては、「否。寧ろ富に一層大なる勞働を課す。蓋し富者は神より最大の賃銀を受くる者なれば、彼等は神に對して最も多く勞働せざるべからず。たとひ外部的必要の彼等を促迫するものなしと雖も、彼等は貧者と同様神に仕へ、他人に善をなすべき必要を有す。」(三・五七九―五八〇)と答へる。此の言葉は彼が他の場所に於て(二・三三三―三三四)、富者は或る苛酷なる勞働を免ぜられるが、其の代り他の仕事に由りて更に多くの奉仕を行ふべきであつて決して最貧者よりも少なき奉仕を以て容されるものではない、と言つたのに較べて、勞働と富と

の關係に就て遙かに徹底せる思想を表はせるものであつて、坐ろに資本の社會的意義を想はしめられる。

斯くの如く勞働は、幼兒・病人・負傷者・被監禁者・老人の如き無能力者以外の各人に對して、神の命じ給へる義務として課せられてゐる。其れ故に各人は其の長するところに従つて、或ひは肉體的に、或ひは精神的に、勞働を行はねばならぬ。然るに此の目的を最も完全に達し、其の任務を正當に遂げるには偶發的に、氣の趨くがままに行ふところの單なる勞働は充分であるので、茲に必ず職業(stated calling)が要求せられて来る。バックスターに従へば、職業は定住的・常規的課程(a settled, ordinary course)である。職業を離れては勞働は偶發的・非繼續的となり、自ら誘惑に充てる怠惰の時間を多くする。人は一定の職業に従事することに由つて特殊の熟練を増し、必要なる道具と原料とを安全に且つ廉直に供給せられ、従つて他種の勞働に従事するよりも他人に迷惑を掛け損失を蒙らすこと少く、却つて多數の人々を利し社會的幸福を進めることが出来る。即ち職業は勞働の眞の目的を達する最善の途であり、經濟的にして秩序的なる生活を送る鑰である。茲に我々の考察に於ける二個の重要な點がある。其れは共に職業の攝理的解明であるが、一は夙にスコラ學派に現はれたところの經濟的世界の組織に關する説明であり、他は後にアダム・スミスに由つて代表せられるところの私經濟的利害關係の交互作用を説く分業論である。

職業なる言葉は、英語 Calling に於ても、獨逸語 Beruf に於ても、又其の他の諸國語に於ても、命令に基く義務の觀念が隨伴してゐる。此れは、勞働概念に就ても然うである如く、職業概念が現

代の經濟的意義を確立する以前に、攝理的に解明せられ宗教倫理的に規定せられて來たことを示すものである。此の命令に基く義務の觀念は著しく社會的地位の意義を有する身分概念と結合して居る。蓋し命ぜられたる任務は即ち置かれたる地位を決定するからである。今日でも攝理的信仰に生きてゐる忠實なる職人達の中には此の置かれたる地位の思想を豊かに持つてゐるのを見出すことが出来るし、又日常の會話の中にも任務と地位との結合を不知不識の間に繰返してゐるのであつて、職業は、理論上經濟的機構の間に在つては倫理的評價を外にすれば平等なる權利を持つてゐるに拘らず、常に其れに従事する者の身分を思ひ出さしめるのである。加之、資本主義的時代の一特徴的事實として、貧富の懸隔が直ちに社會的地位の觀念と結合し來つて、茲に複雑なる關係を生ずる。固より「職業とは勞働の定在的・常規的課程なり」(三・五八二)と云ふバックスターの職業概念は、我々が殆ど無理を感ずることなくして現代的意味に於て理解し得るのであつて、此處から直接バックスターの社會的地位に就ての考へを引き出すことは出来ない。其れ故に今、職業論に由る外、主として彼の貧者・富者に對する指針、僕婢・主人に對する指針、臣民・統治者に對する指針等を參照しながら、彼の社會的地位觀を窺ふこととする。

中世スコラ哲學に於ては職業組織をも含めたところの一切の人間界の組織を以て神の世界計畫の直接的驗現であると説いた。ルーテルも、スコラ哲學が自然法的秩序を基礎とせるに對立して客觀的・歴史的秩序を基礎としたにも拘らず、同様に人間の社會的構成を職業組織と共に神意の直接的表明であるとし、神が人々に與へ給へる地位と限界とに忍耐することは人間の宗教的義務であると

した。此のことはルーテル主義の世俗觀の根底をなすものであつて、世俗的事件の解釋の消極的なことに鮮かに現はれてゐる。然るにカルヴィンに進んで世俗に對する態度が積極的になると共に職業觀念と社會組織の觀念とを明確にする根據が與へられた。然し乍ら茲に注意しなければならぬことは、カルヴィン主義の發展、從つて清教主義の教理的成長と共に、職業概念がバックスターに見る如く、經濟的意義に於て進歩的に確立するに至つたに對して、社會組織及び社會的地位の思想には尙ほ甚だ多くの原始的・中世的要素が残されてゐることである。「各人其の召されし時の狀に止まるべし」、とのパウロの言葉はバックスターに於ても、職業に就ては嚴守せられなかつたけれども社會的地位に就ては尙ほ保守せられた。即ち職業の轉換は後に述ぶる如く、必しも排斥すべきものではなく、寧ろ義務として行はねばならぬ場合があるときへ考へられたが、貧乏の狀態、下僕の狀態に置かれたことは必ずしも悲むべきでなく、却つて神の恵として安んじて其れに止まることが勸告せられてゐる。

バックスターは貧者に對して曰く、「若し我々の誤解・罪惡・怠惰が其れを汚すことなくば、我々に取つて聖く、賜に滿ち、快き狀態は貧賤なる生活に過ぐるものなし。若し我々が我々の地位の義務を忠實に守らば、我々は其の地位を怨むべき理由更になかるべし。」(四・三七九) 又下僕に訓へて曰く「汝を下僕の生活に召し給へる神の攝理を尊ぶべし。而して汝の勞働に謚き、汝の底き地位を怨むべからず。却つて汝に加へられたる慈惠を知り、其を感謝すべし。」(四・二〇三) 茲にパウロの終末論的思想が明かにそのまま現はれてゐる。「汝奴隸にて召されたるか、之を思ひ煩ふな」とのパウロの

思想は「若し釋さるることを得ばゆるされよ」との親切心を削つた上、バックスターに於て反覆されてゐる。此れは彼の職業轉換の思想と奇妙なる對照をなすものであつて、又最近世に於ける社會的階級觀と著しき對立をなすものである。バックスターからは決して現代に意義に於ける階級思想が出て來ないことは、彼が統治者に對する臣民の義務を説く場合にも明かである。曰く、「神を初めとし、神の役人たる汝の統治者に窮極に於て神に仕ふる心を以て服従すべし」(六・三七)と。茲にも羅馬人に送つたパウロの言葉が其のまゝ再現して居る。此れはカルヴィンに於て見出されると同様な秩序保全の願望に他ならぬ。神は其の指定せる秩序の保持を冀ふが故に、神の確立せる各種の優位を侵害することなく、尊重を以て存続すべきことを命ずる。さればバックスターが自らクロムウェルに同意しなかつた如く、「謀反に趨くあらゆる誘惑を避け、服従に身を置く」(六・三八)ことが絶對的に必要となる。何故に外的權威を認めねばならぬかと云ふことは、カルヴィンに於けると同様に、人間社會全體が一の「基督の體」を組織すると云ふ大目的の爲めであることは勿論であるがバックスターに由つては其の上人性論的觀察も加へられた。即ち人類が社交的存在者たり、又公共の福利を増進する爲めにも外的權威に由る統治に服従せねばならぬと考へた。バックスターが教會政治の上では長老派の代表者であること、又彼が教理上自己の進歩的立場にも拘らず、フリーカーの民主的傾向を攻撃したことは共に此の點から解釋することが出来る。

職業の攝理的解明に伴ふ社會的地位の思想が以上の如く取り殘されたに對して、私經濟的意義を豊かに持つてゐる又スミスの分業論を想ひ起すところの職業觀はバックスターに於て大いに展開し

た。職業の分化は熟練を加へ、従つて勞働の質的・量的向上を來し、遂に最大多數の最大幸福を促進する。斯かる功利主義的・實際主義的思想への轉向が既に現はれてゐることは、當時の世俗的文獻に於て通常であるが故に怪むに足らないとするならば、バックスターが、「職業以外に於ては人の勞働は單に非繼續的・偶發的であり、従つて彼は勞働に於てよりも遊惰に於て多くの時を費す」と説き起し、職業者は「他人が絶えず混亂に陥れるとき秩序的に彼の勞働を爲し得べし。……故に一定の職業は何人に對しても最善なり、(三・五八二)と結ぶ場合に特に清教的色彩が鮮明であることを注意すべきである。非繼續的勞働は例へば日傭勞働者には避け難いものであつて誠に止むを得ないこともあるが、甚だ願まほしからざる中間狀態である。又失職者の生活には在家的禁欲思想が要求するところの系統的・法式的性質が全然缺けてゐる。

尙ほ考へねばならぬことは、バックスターの職業分化の思想の中に功利主義的見解が含まれてゐるやうに見えても、其れは正當なる意味に於ける功利主義と云ふことは出来ないことである。寧ろバックスターに活きてゐるものは世俗々神の榮に役立たしめやうとする純乎たる清教主義のみであると云ひ得る。功利主義的傾向が地上的文化目的を指してゐるに反し、清教主義は、現世的なるもの一切を單に全一的に包擁し、全體の爲めと云ふ愛の目的に歸一するところの神を中心としてゐる。功利主義は博愛を非人格的に取扱ひ、清教的の「總てを神の榮に」と云ふ神的專一性を排斥する。清教的の職業觀念に於ては、ルーテルに於ける如き一度神に由つて定められたる籤に甘んずることを力説せずして、職業の法式的・禁欲的性質を重んずる。其れ故に、一方に於て職業分化の傾向が是

認められると共に、他方に於て一般の幸福及び自己の精進に對して有益にして而かも他の何人にも有害でない場合、又結合されたる職業の一に不忠實になるに至らない場合には、何人も數種の職業を兼營することが許されるばかりでなく、職業の轉換も、其れが放埒とならず神を喜ばせ得る更に利用多き職業を捕へ得ると云ふ風に成るならば、必ずしも悪いとは考へられない。否、寧ろ轉業の義務がある場合がある。バックスターは曰く、「何人も召命なくして如何なる職業をも採用又は轉換すべからず、然れども召命を受けたる時に轉換せざるは寧ろ罪なり。使徒は使徒と成りし時其の職業を轉換せり。尙ほ如何なる時代に於ても教役者の多くは皆然り。」(二三三)

職業選定に關して必要な注意は、其れ故に、神を喜ばせ奉ることを目的として考へねばならぬ其の標準は第一に道德的なること。第二に社會奉仕的なることである。之に就てバックスターは例示的に、最上に官公吏・牧師・教師・醫師・辯護士・及び農夫・牧羊者を挙げ、次に海員・衣服商・書肆・其の他日用必需品を取扱ふ者を掲げ、廢すべきものとしては煙草屋・レース屋・鬘屋を數へてゐる。

殊に彼が、二個の職業の孰れかを選択するに當つて富貴を獲るに近きものよりも自他の靈魂と公共の福利とを改善するに便なるものを探るべしとなし、辯護士と牧師とを比較せるは、實に彼の青年時代に於ける痛切なる經驗を語つてゐるものである。第三に、神を喜ばせ奉るべき標準として實際上に重要な點は、職業が經濟的に收利力に富めることである。バックスターは曰ふ、「第三に（即ち公共の福利と汝の靈肉の健康とを考慮したる後）汝の職業の利益を圖るは正しきことなり。たとひ富を得んと思ひ煩ふこと勿れ（箴言二十三章四節）と記されたるも、其の意は富を汝の主なる目

的となすべからずとなり。然るに高尚なる物事に服すれば富を獲るも亦可なり。(三・五八五)

斯かる收利思想は少くとも初期の大陸的敬虔主義に於ては見出すことが出来ない。然るに英吉利の清教徒は到る處に於て現實に活動し給へる神を見るので、此の神が一人の信者に收利の機會を與へたとするならば、其れは必ずや神が何らかの目的を持つて居り、其の信者を通じて神の榮を現はさうとするものであると考へた。其れ故に信者が此の機會を失はず、寧ろ此れに乗じて利を收め、以て其の使命を果さねばならぬ。其の機會に於てこそ自己の天分を發揮し得るのである。バックスターの語に曰く、「成功と正しき利益を獲るに最も良き方法にて勞すべし。汝は汝の主より授かれる才能を總て用ひざるべからず。……若し神が汝に、汝の靈にも他の何人にも害なくして、他の方法に由るよりも多くを儲くる正しき方法を示す場合、汝が此れを拒みて少き利を獲る方法を選むならば、汝は汝の職業の目的の一に背馳し、神の執事たることを拒み、神の賜を承けながら神の求め給ふ時神の爲め其れを用ふることを否む者なり。汝は、固より肉と罪との爲にあらず、神の爲にこそ富むべく勞すべけれ。」(三・五八五—五八六)

此の思想はバックスターに在つては決して彼の生活せる經濟的環境の反映ではない。彼の傳道事業の中心地であつたキツダーミニスターは寧ろ、最近に至るまで道路は不規則であり家屋は大部小さく且つ賤しく、彼の時代に於ける其の町の職人も商人も富める者とはなく、謂はゞ其の日暮しの生活をする者が多かつた位である。バックスターの斯くの如き積極的見解は偏へに彼の神觀に基くものである。之を同時代の他の代表的説教者の言説と比較するときに其の差異の著しきことを見

出し、彼の神觀の特殊なる効果を知ることが出来る(4)。斯くて職業の禁欲的意義に由つて近世の専門職業者・自由職業者の立場が倫理上に醇化せられた如く、收利機會の攝理的解明に由つて營業者取引者の立場をも醇化した。貴族・富豪達の虛榮に満ちた誇飾と遊惰は禁欲的に忌むべきものであるに反し、質朴なる市民的自立者の經濟的奮闘は完全是認せられる。「神彼の業を祝福し給ふ」(God blesseth his trade!)とは首尾よく事業に成功し神の攝理に従つたところの聖徒に對する常套語である。信者は熾然其の職業に精勵し、一身を常規的・秩序的就職狀態に置き、過食・過飲・過眠を避け、其の仕事に愉快を感じることが大切である。此處に事業そのものを自己目的とする資本主義的企業家の態度が禁欲的意義に於て現はれてゐる。斯くの如き職業觀念に存する聖書的、殊に舊約的要素の更に細かき點檢は興味あることであり、従つて又其の猶太的分子との交渉も一問題となるのであるが、予は茲に其れには立ち入らない。

我々は進んで此の清教的職業勞働觀と其の禁欲的生活實行が資本主義的生活樣式の發展の上に如何なる點に於て影響を及ぼしてゐるかを研究して見やう。直ちに頷かるる如く、職業生活を尊重する精神は反面に於て羈絆なき享樂と遊惰とを排斥する態度を表はすものである。怠惰は時間の浪費であり、時間の浪費は神の賜を無用にすることであつて、神に對して盜みを働くに等しく、又管に一個の罪を犯すことであるばかりでなく永續的な罪の狀態に陷ることである。怠惰は諸々の罪の母又乳人である。従つて禁欲的根本思想が全力を盡して敵對したものは遊戲と保養との耽溺である固より遊戲・保養は心身を適當に使用して官能を高め英氣を養ふ手段として、或る程度まで、又或

る種類に限り、正當なるものと認められ、寧ろ義務として行はねばならぬものと考へられる。然し乍ら假令最も正當なる種類の遊戲であつても之を過度に享樂することは許されない。耽溺は靈魂を腐敗させる。過度は時間浪費である。其れ故に最も賢明なる途は利益と享樂とを結合することであつて、自己の職業のうちに愉快を見出すとか又は遊戲の間にも健康の増進を圖るとかの工夫を凝らすべきである。此の反耽溺的精神が最も著しく現はれたものが、ジェームス一世及びチャールス一世の時代に清教主義に對する挑戰の目的を以て制定せられたところの所謂「遊戲書」(Book of Sports)を攻撃し其れを承認しなかつた事實である。清教徒が、聖日の禮拜時間以外に國民的娛樂が合法的に認可せらるるとの王命に、如何に激しく反抗したか、其れは嘗に其のことが安息日の平和を破壊する故ばかりでなく、聖徒の秩序的生活を故意に斷絶する機會を與へる故でもある。而して國王が此の遊戲の合法性を攻撃する者は何人でも重き刑罰に處すると脅かした目的は、國家に危險なる反權威的・禁欲的精神を打破する爲であつた。君主專政的國家が其處に發生せる市民道德と反權威的秘密集會とに反抗して頽廢的傾向を有せる俗人を保護したことは、恰も今日の資本主義的社會が労働者階級に發生せる自律的道德と反權威的勞働組合とに反抗して不勞所得に由つて生活せる財産階級を保護してゐるに等しい、とはヴェーバーの指摘するところである。(5)

職業勞働にも信仰生活にも共通に有害なる衝動的享樂生活は合理的禁欲生活の敵であるが、従つて清教徒は宗教的價值なき文化財に對しても甚だ反抗的態度に出でる。勿論、文化を解せざる暗鬱なる百姓氣質が清教的生活理想に含まれてゐる譯ではない。寧ろ少くとも學問に對しては、忌ま

れたるスコラ哲學を例外として、其の反對が眞である。加之、清教主義の最大代表者達は孰れも皆基督教文藝復興の敎養の中に深く沈んだ人々である。即ち長老派の有力者の説教は多く古典から流れ出て居り、クエーカーの先驅者達すら、勿論其れを心持よく思はないにも拘らず、古典研究を輕蔑しなかつた。恐らくは其の成立の初代に於ける新英蘭ほど「學位者」(Graduates)に豊かであつた所は無かつたであらうと云はれてゐる。反對者の諷刺は清教徒の書齋學問を攻撃するけれども、此れは沈黙的信仰を喜ぶ舊敎的態度から生じた知識の宗教的評價に他ならぬ。清教徒は斯くの如く學問を尊重した。然し乍ら非學問的文書、例へば小説の類に踏み込むと様子が全く異つて来る。パツクスターも危險なる時間空費の一目として脚本・小説・戯史を讀むことを、無益なる研究をなすことと共に並べて數へてゐる。此處に禁欲的精神が明瞭に現はれてゐるのであるが、此の點に就て英吉利と和蘭とが興味ある對立をなすものであることは特に美學史の研究に委ねて置く。

此の感覺文化を否定する觀點は文學・藝術に止まらず、無駄話・餘計のもの・詰らぬ裝飾など總て非合理的・無目標的なるもの、従つて一切の非禁欲的なるものに擴張せられ、人々を質朴なる合目的性にのみ趨かしめた。今日の資本主義的利害關係が助長してゐるところの生産物の標準化、生活様式統一の傾向、更に又勞働生産力の増進を圖る目的と結合して行はれる禁酒・廢酒の運動並に實行は、確かに此の觀點が思想的根據となつてゐる。固より此の場合忘れてならないことは、清教主義のうちに於ても藝術に於ける超時間的偉大性に對する尊重が存在してゐることを證明し得ることである。實際清教主義の代表者の中には詩人ミルトンを見出し得ることが出来る。然し乍ら清教主

義の影響を考察するに當つて今の場合我々は、美的享樂のみに役立つところの文化財を樂むことが許されるには常に一の特微的制限が存在することを特に注意せねばなるまい。其れは即ち斯かる文化財享樂の爲めに決して費用を出してはならぬと云ふことである。人は神の恩寵に由つて彼に歸屬せしめられたる財を保管する、其の場合聖書に現はれたるかの下僕達の如く(6)、彼も其の託されたる各一厘に就ての勘定を報告しなければならぬ。神の榮を現はす爲にならずして自己の一時的享樂の爲めに支出した者は咎めらるべきである。バックスターは誠めて曰く、「我々自身、我々の子女、朋友の爲めに支出する各片^{ペニ}は神の指定に由り、且つ神に仕へ神を喜ばす爲めに用ひらるべし。細心に注意せよ、然らざれば此の盜み易き肉慾的なる自己は神の爲め何ものをも殘さざるべし。」(二・三二七) 従つて茲に凡帳面なる小市民的會計思想が生ずる。即ちバックスターに於て、其れが精神的意義に於てなることの辨解あるにも拘らず、我々は文字通りに解釋して明かに消費會計的訓示を發見する。曰く、「汝の費用の會計を記すべし……志^{シリングベニ}・片を以て彼の好むところを行はんと考へ、又主人の爲めに多額を、己が爲めに少額を支出せんとする下僕は、其れのみにては不忠實なる者にして彼の會計に遂に不足を生ずることあるべし。磅^{ポンド}以下の少額も尙ほ我々の勘定に記入せられざるべからず。」(二・三二六)

斯くの如き思想は今日一般に行はれるところである。忠實なる管理者として、營業上の機關として、彼に委託せられたる財に對する義務の觀念は責任の感情を以て益々強くなつて行く。固より他の資本主義的精神の多くの構成要素と共に、此の會計思想の根底も中世に立ち還つて、數的正確感

の進歩と相俟つて、商號 (Firma) と氏名 (Name) との分立、即ち工場又は營業所と私宅との分離、營業財産と家財との分割、「營業」を一の抽象的團體とする傾向と結び付けることが出来る。然し乍ら其れが禁欲的清教主義の職業觀に於て初めて徹底せる倫理的基礎を見出したと云ふことに我々の考察が向けられるのである。

斯くて清教的職業觀は一方に於て消費殊に奢侈的消費を拘束すると共に、他方に於て傳統的倫理の束縛から財獲得の思想を解放した。即ち財獲得を合法的なりと認めるばかりでなく、其れを直接に神意と結合するが故に、獲得の途上に存する一切の障礙を除去するに努める。肉慾に對する戰、外的財に依頼する心との爭は、決して富の獲得に反對する戰爭ではなくて、寧ろ其れと結合し其れを促進し其れを容易ならしめやうとする試みである。財所有者に節欲を勧めるのは財の益々増加する爲めであり、所有財が消費の目的物としてではなく其れ以上の生産の手段として用ひられる爲めである。繰返して言ふならば、貪慾・拜金として忌むところの其れを自己目的とする純衝動的なる利益追求・財獲得は一の誘惑として排斥せられるけれども、職業勞働の結果たる富の獲得を神の祝福と見、更に進んで斯かる定在的・系統的・合理的職業勞働を最高の禁欲手段として宗教的に評價し同時に又其れを信仰の驗證手段として尊重する。而して斯くの如く消費の制限と營利追求の解放とを結び付けるところに近世的意義に於ける資本構成と云ふ外的結果が生じ、消費財に對立して資本財が起るのである。

以上、清教的收利思想と會計思想との綜合のうちに近世資本主義的精神の成立を倫理的に基礎付

けて見たのであるが、我々は此の際全然方向を轉換して最近に於ける社會連帶思想の清教的典型をバックスターの賣買及貸借觀の中に求めて見ることにする。而して實は彼の賣買論及び貸借論には前者が商業道德とも考へられ、後者が法律論とも言へるほど、幾多の雜駁な觀念が羅列せられてあるので根氣よく探求すれば、少くとも經濟學的概念に就て見ても、價格・利潤・利子・市場等の諸概念が現はれて来る。然し乍ら其等を一貫してゐる一つの精神は、云ふまでもなく、博愛・自己犠牲の社會連帶的思想である。

バックスターは、自己の利益のみを考へることは、たとひ其れに由つて幾許の利益を積むとも、罪に由つて其れ以上を失ふことあるを誠告してゐる(六・二八七)。尤も清教主義に於ても既に利己心の作用は充分に考慮せられて居る。神は決して隣人を自己より深く愛すべしとは命せず、唯々自己と等しく愛すべしとのみ命じたに過ぎない。進んで人は自愛の義務さへも持つてゐる。例へば、隣人の行ふよりも一層目的に適へる、従つて一層神の榮を現はすやうに自己の財を處理することが出来る場合には、隣人に其れを與ふるよりも自己が持つてゐることが神に對する義務である。バックスターも或る程度まで自愛心を聖化した。然し乍ら自愛が肉的自己を中心として感覺的程度に止まつてゐるときは決して許さるべきものではない。其れは神に對する義務の怠慢である。此の思想は彼の賣買觀即ち商業道德論の根底をなすものである。即ち賣買に従事する場合にも自己の利益と共に公衆の利益が考へられねばならぬ。更に個人よりも多數者を高く評價すると云ふ功利主義的思想から、自己の利益よりも公衆の利益を重んぜねばならぬと云ふことに成る。バックスターは命じて

曰く、「汝自身の利便以上に公共の福利を考慮すべし。其の爲めに、汝の營業自體に就ても又汝の賣買する物の價格に就ても、汝の居住する國の法律に特別の注意を拂ふべし。又公衆の評價及び市場價格を特に尊重すべし。」(六・二八)

此等の指針が語つてゐる如く、賣買は交換經濟内に行はれる公共的事象であらねばならぬ。他人の虚に乗じて暴利を貪ることは許されない。「利潤は欺瞞又は他人の必要・誤解・無知に乗じて取るべからず。」(六・三〇) 例へば饑饉に際して購買者の知らざる豊富にして廉價なる食料が手に入る時に其れを買手に告知し自己の利益を犠牲にする義務ありや否やの間に對してバックスターの答ふるに「敵と取引する場合、又斯かる事柄に頓着せざる富者、又汝同様其のことを知れる人々と取引する場合には、汝は彼等に其のことを告ぐる義務なけれども、通常の平等なる取引に於ては……汝は其のことを相手に告げざるべからず。何となれば汝は隣人を汝自身の如く愛せざるべからざればなり」(六・三〇) 斯くの如く財の蓄積、財の交換は總て其の社會的效果を考慮して行はるべきものと考へられる故に、營業上取扱ふところの商品の將來の缺乏を見越して賣惜むことも、其れが現在に於て他人の福利を害ふことなく、却つて將來の缺乏に當つて其れを正當なる價格にて賣出すことが社會的幸福を増進する場合に限り、許さるべきものである。此の平凡なる商業道德論の裏には昔ながらの福音主義倫理が流れてゐることを見る。

然らば凡そ商品の評價は如何なる根據に於て行はるべきものであるか。固より我々にはバックスターから正しい價格論を期待しない。第十七世紀の一代代表的價格論を聴きたければサー・ウィリア

ム・ペティに就けばよい(7)。けれども、其れにも拘らず、我々は價格と利用性との關係、及び價格と利潤との關係がバックスターに由つて云々せられるを聴くときに、暫く其等の經濟學的重要問題の前に佇立せざるを得ない感じがするのである。先づ此等に關係するバックスターの言葉を引用すると、商品の價值(Price)は如何にして判定せられねばならぬかとの問に對して答ふらく、

「一、現在、麵麩・飲料に就て行はるる如く、其の物に就ての定率を法律の定むる場合は之に準據すべし。

二、汝若し市場に出づれば市場價格に準據すべし。

三、欲望を感ぜざる者と平等なる契約を爲す場合には、汝の商品を其の汝に對する費用に由り、若くは其の汝に對する價值に由りて評價すべく、其れが普通の價格を超ゆるとも差支なし。蓋し商品を探ると探らざるとは全く買手の自由なればなり。

四、然れども汝の賣るべき物、或る人に取りて汝又は他の人に比して遙かに願はしきもの又價值あるものなる場合、汝は彼の便益又は願望に大いに乗すべからず。寧ろ進んで平等・公平・正直なる條件を以て彼を喜ばすべきものなり。

五、固より、汝の商品に市場の氣付かざる隠れたる價值する場合(此れ馬に普通のことなり、とバックスターは註を附けてゐる)、能ふべくんば汝其の眞の價值を其れに應じて取ることは正しきことなり。(六・三〇七・三〇八)

又「予は予の能ふ限り廉く買ひ、或ひは物の價值以下を對價として與ふるも可なりや、」との問に

バックスターの答へるには、「物若し汝の必要の爲め市場價格以上汝に價值ありとせば、其の場合汝は市場價格以上を支拂ふ義務なし。然れども他人の財又は勞働を此等兩者の評價、(即ち公衆の評價と汝自身の評價) 以下にて得んことを願ひ求むべからず。」(六・三二〇) として消費者餘剰の正當なることを承認し、而かも其の正當なる消費者餘剰は交換經濟内の客觀的事象としてのみ起り來るものであつて、消費者個人の工夫詭計に由つて生ずるものではないことを説いてゐる。更に問に曰く、「予は他人の窮迫に乗じて彼の物を其の價值以下に買ひて可なるや。」其の答に曰く、「汝先づ正義の行爲と慈善の行爲と、又物に對する汝の必要と其の物の汝に對する價值とを區別せざるべからず。たとひ汝今貧者の財を必要とせずとも、正義と慈善と兩者、若し其れを購ひなば、たとひ其の財の市場に於ける價值に及ばずとも汝に對する價值の程度に於て彼に對價を支拂ふこと、而して窮迫せる彼より其の財を購ふべきことを汝に要求す。蓋し汝は其の財の汝に價值ある程度を彼に與ふるに過ぎざる故汝自ら其れによりて毫も損失者たらず。而して汝自らの損失・損害たらざる場合汝は他人の福利を圖るべきなり。」(六・三一〇)

バックスターに従へば、財の人に對する價值(what they are worth to you)は買手が損失者たらざる程度の最大對價を意味する。即ち茲に交換價值の基準が定められた。そこで斯くの如き「價值」(worth)が、公定價格・獨占的市場價格を除いて、「價格」(Price)の基準たるべきものとなる。然るに買手が損失者たらざる程度に於ける最大對價は買手の異なると共に、其の必要の緊度に應じて變化する。換言すれば斯くの如き價值は主觀的利用評價に他ならないから客觀的統一は歸し難い。故

にバックスターに依れば、價格決定は絶對的標準に基くこと能はずして常に相對的にのみ定まる。勿論彼は此の利用性を考へると共に明かに、「汝は汝の財を其の汝に對する費用に依りて評價することを得、」(六三〇セ)と斷言して「費用」(cost)の要素をも考慮してゐる。然し乍ら費用が如何なるものであるかに就てはもはや立ち入つた説明をしない。寧ろ彼は賣買の實行に就て生産者費用よりも消費者利用を尊重してゐる。しかも其の場合に消費者の購買力が著しく考慮せられてゐる。其のことは彼の利潤論に就て見ると判る。「利潤」(profit)即ち「勞働又は財の價值以上に求むるもの」は、「汝自身よりも貧乏なる者又平等なる取引のみをなさんと志す者」から取るべきものではなく、「寛大にして小事に執着せず、喜んで他人を利得者たらしめ、而かも己が爲すところを知るところの富者と取引する場合には、彼の與ふる限り多くを取りて差支なし、」(六三〇セ)と考へられた。

尙ほ注意すべきは、バックスターが利潤を説く場合に勞働又は財の價值以上と云へる其の價值なる概念は前述の利用本位のものではなくて費用本位のもので解することが彼の主意に合してゐると考へられる。勿論、或ひは自己の其の物に對する利用價值と考へても興味ある思想を誘導することが出来るけれども、當時の利潤概念と比較するときに其れは無理である。斯くして價格は、利潤をも含みて、決して絶對的に決定せらるべきものではなく、必ず相對的にのみ決定せらるべきものである。然ればとて買手の購買力を測定する手段として懸値することは良しくないと誠められて居る懸値を行ふ商習慣ある地方に於てすら「正當なる利益」(just gain)以上を要求してはならぬ。しかも固より此の正當なる利益は不可分的・固定的なる價值ではなく、自己の營業所得に由つて家族を

養つてゐる人は其れに應じたる節度ある利益を得るも差支はない。斯くの如き利潤は懸値に由つて探り取るよりも寧ろ堂々と要求すべきものである。「最も正直なる方法は、此の品物は幾許の價值（此の場合バックスターが費用本位に考へてゐることは明かである）なるが、予は必要なるが故に其れ以上幾許を與へよ。予は其れを感謝を以て受けん、と云ふことなり」（六三〇七）とバックスターは訓へる。

賣手は買手を誤解に陥れないやうに取引すべきであるけれども、——バックスターは此の際危險負擔の問題、瑕疵擔保の問題等の法律的事項にも觸れ居ながら（六三二一—三二四）——商品の修飾・陳列に意を匠して其の眞價を發揮することは正しいことであり、又人々の好奇心・氣分を利用善導して物の眞相に觸れしめることも許される、との廣告心理學の根本問題にさへ論及した。然し乍ら又取引は嚴肅に行ふべきものであつて、賣買に當つて冗言を吐くことは禁すべく、殊に争ひ好きの人との取引は、其れから多くの誤解・憤怒・非難及び不平を生ずるから、寧ろ避くべきことであると誠めた。

斯くてバックスターの賣買觀に於て最も注意すべき點は其の中に豊かに含まれたる社會連帶思想から生ずる社會政策的意義である。彼は「正義」(justice)と「慈善」(charity)との二原理を以て價格論を貫くところの精神としてゐるが、其れはやがて彼の商業道德論の骨子とも見られるのである。

「予は予と取引する者が取引に於て予と等しく利得者たるべく努むる義務ありや、との問に對して直ちに「然り」と斷じて徐ろに説いて曰く、「若し汝等等しく必要に迫り又は等しき狀態にて在らば、

然れども若し彼甚だ貧しく汝富まば、慈善は正義と共存せざるべからず。……又若し汝貧しく彼富まば汝獨り利得者たることを許さるべし、(六三〇六)と。此の問答のうちに主客を超越したる社會連帶思想が充分現はれてゐる。貧者の提供する物は、たとひ現在自ら必要を感せずとも、其れを正當なる價格にて買ひ取ることは、正義と慈善とを兼備せる行爲である。又買ひ取る物が耐久財であるならば、賣手が他の機會に於て買戻し得る權利を認むべきである。否、貧者が其等の財を廉値に手放すことなきやう彼に資金を貸し與へることが勧められねばならぬ(六三一)。斯かる博愛的共產主義の根本思想はバックスタアの貸借思想の中にも充分之を認めることが出来る。彼はカルヴィン以後既に其の授受が是認せられ來つたところの利子に就て、諸種の例示を行ひながら是認論を保持せんと試みてゐるが(六・三一九―三三五)しかも利子授受が正義若くは慈善に反する場合には其れは罪あるものであると斷言した。自分が資産を有し、隣人の必要が其れを要求する場合に其れを貸すことは寧ろ自分の義務である(六・三二七)

思ふに清教的經濟思想の力の及ぶ限り、總ての事情の下に於て、經濟的合理主義の生活實行の傾向を助長したことは、單なる資本構成を助長したよりも、又社會連帶思想を促進したよりも、遙かに重要なことであらう。合理的生活こそ清教的人生觀の最も最も本質的にして獨立的なる結果である。市民的・合理的生活は近代の經濟人の觀念の生れ出る源を開いた。此の場合に考へねばならぬことは、宗教的思潮が其の明かなる經濟的作用を展開する過程であつて、禁欲的清教主義に就ては先づ純宗教的信仰が頂點に達し、神の國と其の義とを求むる爲めの奮闘が徐々に節度ある實行道德

となり、職業勞働の倫理に達すると共に宗教的地盤から漸く遠ざかり、功利的世俗性が濃厚の度を加へて行くのである。勿論、宗教性と經濟性とは夫々独自の發展力を有して居るとも考へられるのであるが、其れは宗教學及び經濟學の各自が其科學的任務を盡すに當つての方法論上の想定であつて、歴史的なる發展の一階段の描寫としては上述するところに誤りはない。

清教的經濟思想は節度あり良心健かなる、且つ神の求め給ふ勞働に粘着するところの勞働者を支配するときに、勞働者に對して、此の世に於ける財の不平等なる分配は神の秘密なる計畫である、と云ふ一の攝理的慰藉の思想を與へる。此のことから低廉なる賃銀に於て完全なる生産力を現はすことが可能となり、やがて資本主義的に受取られては低廉なる賃銀に由る生産力増加説と結び付く更に此れが營利思想の禁欲化に伴つて此の特殊の勞働心に乘じて勞働者を酷使することを合法化する。此の特殊の勞働思想と既に述べたところの收利思想と會計思想とが相結んで、經濟的合理主義の根底を形造るのであるが、嘗に其ればかりでなく清教的經濟思想は近代文化の構成要素たる職業を基礎とせる合理生活の實行を促進した。清教徒は職業人たらんことを欲した。無職無爲の生活は彼等に取つて恥かしいことであつた。蓋し禁欲思想が修道院から職業生活に移され、所謂在家的禁欲主義が勢を振ひ出してからは、其れが機械的生産時代の技術的・經濟的要件を取り揃えた。即ち茲に息を吹き込まれたる一の經濟的世界を造り出した。即ち此の經濟的世界は今日嘗に營利行爲者ばかりでなく、其の中に生れ來たところの總ての個人の生活様式を規定し、其の規定力は尙ほ將來にも續かんとしてゐる。禁欲が世俗を改造し世俗の中に自ら活動せんと企てるや否や、此の世の外的

財は駸々乎として増進し、結局逃れ難き壓迫力を人間の上に加へるやうになつた。今日清教的精神は昔の偉大なる支配力を失ひつつあるやうに見える。優勝せる資本主義は其の機械的基礎を確立して以來、最早や精神的守護を必要としない。現代人の間に於ては職業義務の思想は過去の宗教的信仰内容の幽霊として現はれるに過ぎない。職業生活が直接に最高の文化價值に關係せしめ得られない場合、或ひは主觀的に經濟的義務として感ぜられない場合、人々は一般に職業の倫理的意義の説明を等閑に附する。予の知人は、現代の社會組織の下に在つては職業を執ることは猶ほ糞を垂れるやうなものである、と豪語して實業界に飛び出した。今日産業國民として代表的なる亞米利加人の間に於ては、清教的資本主義の實行が、或ひは廢酒令に、或ひは露獨救濟事業に、或ひは支那幫助に國民的に大規模に表現せられてゐるにも拘らず、又清教的精神が一部の勞働階級に於て今尚ほ昔ながらの作用を現はしてゐるに拘らず。形而上學的意義を脱せる個人の營利行爲は今や屢々遊戲の性質を印せられること決して珍しくないほど氣分的のものと成つてゐる。而して此れと同様の傾向は、資本主義的經濟機關の最頂點に立てる全世界の取引所場内の雰圍氣の中に之を見出すことが出来る。(神戸・一九二二・二一九稿)

Fachmenschen ohne Geist, Genussmenschen ohne Herz:

dies Nicht's bildet sich ein, eine nie vorher erreichte Stufe
des Menschentums erstiegen zu haben.

(1) Cf. Sir William Petty, Treatise of Taxes and Contribution, Chap. X. §10. (Halls Edition. 1. P. 68.)

- (2) Cf. George Unwin, *Industrial Organization in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*,
W. A. S. Hewins, *English Trade and Finance chiefly in the seventeenth Century*.
- (3) Vgl. Hermann Levy, *Die Grundlagen des ökonomischen Liberalismus in der Geschichte der englischen Volkswirtschaft*. SS. 55—69.
- (4) Vgl. Max Weber, *Religionssoziologie*. Bd. I. S. 176. Bemerkung (1).
- (5) M. Weber, a. a. O. S. 183.
- (6) 馬太傳第二十五章十四節以下之記事。
- (7) Vgl. Wilhelm Roscher, *Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre in 16. und 17. Jahrhundert*.
Leipzig 1851. S. 67ff.

(完)